

背を見て育つ関係

「生成の学び」のための「異年齢集団」

石塚 諭 (I)

久保田 哲司 (K)

I 最近幼稚園の先生から興味深いことを聞きま
した。幼稚園の園児たちは遊びによって構成集団
を変えるところです。「ルールがある遊び」、例
えばドッジボールやサッカー等は同年齢集団で行
い、「ルールがない遊び」、例えば虫取り遊びや砂
遊びなどは異年齢集団を構成する傾向があるそう
です。

K それは意外です。私は、その逆だと思ってい
ました。「ルールがある遊び」は異年齢集団が形
成されて上級生からルールの遵守を促され、他
方、「ルールがない遊び」は同年齢集団が形成さ
れるのかなと。

I いやいや、違います。小学生でも同学年での
サッカー遊びでは上級生を入れることに拒否反応

を示すことがあります。

K では、このことをどう解釈すればよいでしょう。「ルールがない遊び」は遊び自体を集団の成員で創っていくことですよ。創造活動には、上級生の運動を含めた様々な経験が必要不可欠です。このことを「生成の遊び」と名前を付けておきましょうか。他方、「ルールがある遊び」、例えばスポーツ遊びはルールに従うことで遊びとして十分成立しますから、そのルールを遵守すること、だけでよいわけです。これは、「生成の遊び」に対して「享受（消費）の遊び」といえるのではないのでしょうか。

I 決められたルールでルールどおりにやろうとする「享受（消費）の遊び」では、異学年が入ること、チーム間の力の均衡が崩れ、同時にチーム内の力の均衡も崩れることが予想されます。

K 今、子どもたちには自分たちの楽しみに応じ

て既存のルールを変える力が欠けているということでしょうか。

I いや、変える力がないというよりもむしろ、変えなければならぬ状況に遭遇しない、変える必要がないのです。

K なるほど。学校は制度的に、学年で横に区切られているわけですから「ルールがある遊び」だけなら、そういった問題はあまり生じないでしょう。しかし、果たしてそれでよいのでしょうか。学校教育現場では、しばしば異年齢集団または縦割りの集団の必要性が話題に上ることがありますよね。

I わが校でも異年齢集団での実践がなされています。

K それはどんな問題認識の上に立つての実践なのですか。

I 何と説明すればいいか（笑）。ただ、この異

年齢集団というものは、我々が幼少の頃は多く存在しましたよね。

K 確かに見られました。ということは、以前見られて、現在は見られないから復活させようという復古主義的な発想からの実践なのですか。

I ねらいとして上級生の統率力や協力、思いやりなどの発揮をまず思い浮かべますが、ただ我々はその深層にある異年齢集団の機能である「何か」を共有していると思うのです。

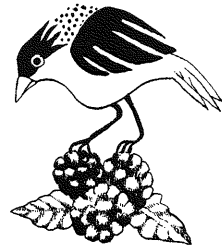
K しかし、いま多くの識者から指摘される子どもに関する諸問題の原因のひとつに異年齢集団が形成されないことを直結させるのは少々乱暴な論理だと思っています。

I 確かに。もちろん、遠因の可能性はありますが。現在の子どもたちに求められるものは「生きる力」です。この力を育むために「生成の学び」の場が必要不可欠であり、そしてその認識の上に

立つと「生成の学び」の促進に異年齢集団が有効な手段なのかを問うた方が建設的ではないでしょうか。

K 同感です。高校における異年齢集団と云えば、部活動や体育祭でしょうか。部活動は、各教科の学習では得られない満足感や達成感を味わうことができます。全校生徒が対象なので、その形態は異年齢集団となります。「先輩」「後輩」という名称を覚えるのは中学校の部活動からではないでしょうか。

I こういったところで社会性の涵養が目指されるのですね。



K 高校生ぐらいになると、三年生が統率力を発揮し、安全で計画的に活動をすすめていくことができるわけです。

I そうなると、三年間継続することで、生徒はやり遂げた充実感と共に大きな自信を得ることに なりますね。

K そうです。月並みな言い方ですが「先輩の背を見て後輩が育っていく」ということです。

I 確かに部活動における上級生の役割と影響力は絶大かもしれません。では、体育祭はどうですか。

K わが校では今年度から縦割り（異年齢集団）の対抗にしました。その意図の顕著な例は応援団です。異年齢集団を形成しているため、他学年の結果も他人事ではなくなります。

I ということは、学年を超えた交流が生まれると。

K それだけではなく、一年生は上級生の統率力や創造力、行動力を目の当たりにします。

I ここには、先の言葉を用いれば、この行為自体が「生成の学び」ということになりますね。

K 上級生の経験が加味されて「生成の学び」が促進されます。しかし、この成果物は、はじめからは予想できません。

I 教員の予想を超えることも考えられますね。

K 逆に、予想に反し、寂しいこともあります（笑）。

I そういった「生成の学び」は子どもの有能感（コンピテンス）につながるでしょう。

K 部活動や応援団といった異年齢集団による「生成の学び」の場で共通しているのは「明確な目標」があり、参加する成員にそれを成し遂げようとする意欲があることです。つまり単に異年齢集団を作ればよいという発想ではなく、目標達成への意欲や関心を喚起させるような仕掛けが必要

になるでしょう。

I この場合、子ども同士は「上級生の背を見て育つ関係」。他方、教員と子どもとの関係になると、教え導く人と教えを請う人との関係、つまり「向かい合う関係」になりやすいですね。

K この場合、教員は自ら定めたルールに従うことを強いたり、子どもは既存のルールを遵守するよう努めます。さらには、遵守するルールは何かに聞いてくる場合すらあります。

I それでは困りますね。我々は「生成の学び」を保障するために異年齢集団、特に「上級生の背を見て育つ関係」を再評価する必要があるでしょう。

K しかし「享受（消費）の学び」は、既存のものであるため、到達度を定めたり量化できるといふ利点があります。

I だから我々は安心して「享受（消費）の学

び」を用いるのです。その方が教員にとって見通しがもてますから。しかし「享受（消費）の学び」も先人の「生成の学び」の成果であるということ忘れてはならないでしょう。現在は「享受（消費）の学び」ばかりで「生成の学び」が不足していますからね。

K そのとおりです。我々が、学校教育制度が確固たる地位を築いたことによつて失われた「何か」を保障するとしたとき、この「生成の学び」のため「異年齢集団」、すなわち「上級生の背を見て育つ関係」という場を設定する必要があるのではないでしょうか。

I 我々は幼児期から「生成の学び」のための異年齢集団作りを積極的に取り入れ、実証していく必要がありますね。

石塚（お茶の水女子大学附属小学校）

久保田（都立江北高等学校）